

異類婚姻譚におけるジェンダーの中日比較研究

呉

艶

はじめに

異類婚姻譚におけるジェンダー的価値観を考察するには、まず、予備作業として、異類婚の話型分析をしなければならない。異類婚の話型を分析すれば、人間の男性と異類の女とが契りを交わすもの、いわゆる異類女房譚が圧倒的に多く、異類譚に比べて、数的に優位を占めることが分かる。これについて、江馬務氏は『日本妖怪変化史』の中で、次のように主張している。「誑かすには、畢竟、女性を男子を籠絡するに便利な故でもあろう。その反対に男子に化けて、女を籠絡した例は極めて稀である」^①。異類女房譚が多いのは、日本に特異に存在する現象ではない。中国の異類婚姻譚の表出傾向を見れば、同じく異類女房型の話型が多いことは分かる。ただ、その話型によって、比率が多少違ってくる。確かに江馬氏の指摘にあ

るとおり、異類女房譚において、異類の女は性的魅力により、異性を引き付けるものが多い。だが、それ以外の原因も考えられるのではなかろうか。一方、中村禎里氏は、異類譚が排斥されることについて、動物が「雌のばあいは、人の社会を豊かにする。しかし雄の動物神の末裔は人の女性を奪い、その社会を犯そうとする」^②と人間の社会の秩序維持の角度から解析し、社会的な原因を把握している。だが、中村氏は自説の背後にある文化的な深層部まで掘り下げていない。異類婚姻譚におけるジェンダーの裏側には広大な文化的深層が潜んでいるのではないか。本稿では多様な角度から複眼的に検討してみたいと思う。

まず、動物報恩譚において、その動物は女（男ではなく）に化け、人間の男性（往々にして不運な男が多い）に不老不死、地位昇進、財産蓄積など、いわゆる幸運をもたらすものが多い。また、人間の

至誠至孝により、奇跡が起こる話型などにおいても、その主人公は人間の男性に限られている。これらの異類婚の話型では、天帝や神様が派遣した使者は殆ど女である。しかし、そこには異類の女の媚態による挑発が全然見られず、異類女房は神女と格付けされることが多い。もちろん、どの異類女房も端麗な容姿の持ち主であるが。

男性のその美德への褒美に、健康、財富、社会地位の他に、「女色」も惜しまず享受させるといふ趣きは、いかにも「英雄色を好む」といふ男性の昔からの性的幻想に適うものらしい。男性本位の考え方はこれらの内容の中にひそかに滲みこんでいる。ゆえに、異類女房譚が圧倒的に多いという現象から、人類社会の長い歴史における「男権社会」的傾向が見えるのではないかと思う。次に、蛇女房や狐女房の場合、時々人間の男性は異類の女に脅かされたり、食い殺されたりして、いわゆる「女の禍」に陥るといふ発想には宗教的意図がはつきりと見られる。儒教は男女隔離を主張し、「男女七歳にして不同席^③」などという諸般の礼儀を作り、男女の行為を厳しく規定した。『論語』には「戒之在色^④」（色の戒め）が出ているが、これは「君子」に対する戒めであり、古くから儒家と仏家の勸戒として、唱えられてきた。さらに中国の民間には、昔から、「紅顔禍水^⑤」という言い習わしがあり、女性には禍根というレッテルを貼られ、美しい女性はいっそう禍水の相を浮かべる妖女と侮蔑される封建的色彩

の濃い思想が残っていた。これも多数の事例に出ているのは、蛇鱗や狐鱗ではなく、蛇女房や狐女房であるゆえかもしれない。

ところで、このような男性本位の思想は異類婚姻譚の誕生当初から付随するものであるかと言えは、必ずしもそうでないことが考察によって明らかになる。異類婚姻譚は古く、どの時代にも、諸民族の間に存在するものであり、日本と中国の同類のものは、時代的にも、距離的にも、互いに遠く隔たっているとは言え、一致するところが多く見られる。本稿は六朝小説などの中国の古典文学における異類婚の事例を取り上げ、日本のそれと比較しながら、その接点をめぐって考察を進め、更に、社会形態と宗教思想からの影響を考えながら、異類婚姻譚に表出する性差意識を検証することにする。

一 始祖神話における古代人の動物観と女性崇拜

異類婚姻譚を考える場合、中国においては、やはり混沌たる神話時代に遡らなければならない。始祖誕生に纏わる神話は最も古い形態の異類婚姻譚と言えるであろう。動物を帝王誕生の始祖神とする記載は中国の古書では極めて普遍的である。古籍における帝王の系譜を繙けば、漢民族が先祖として仰いでいる黄帝などの伝説上の三皇五帝はもちろん、歴史上の實在の帝王でも、異常な誕生を迎えるものが多い。前漢の司馬遷が著した『史記』高祖本紀に次のような

記事がある。

高祖、沛豊邑中陽里人。姓劉氏、字季。父曰太公、母曰劉媪。

其先劉媪尝息大沢之陂、夢與神遇。是時雷電晦冥、太公往視、

則見蛟竜于其上。已而有身、遂産高祖^⑥。

これは前漢の初代皇帝劉邦の異常誕生にまつわる神話であるが、その父が蛟竜とされ、典型的な異類譚の類型と言える。また、高祖の容貌について、「隆準而龍顏」（鼻が高くて龍に似た顔つきをしている）と描かれている。さらに、酒と女色が好きな高祖が「酔臥、武負・王媪見其上常有龍怪之^⑦」（酔い潰れて横になると、その上にも龍がいるのを見て、周りが怪しがっていた）と劉邦が蛟竜の後裔であることを裏付ける記事がある。蛟竜は鱗のある竜のことで、靈力があると中国人が古くから信じてきた。この話は帝王の誕生が蛟竜のような靈的存在と関わっていることを語っている。竜は中国では神靈化される巨大な伝説上の動物で、天地万物を自在に支配する強大な威力を誇り、古来、皇権の象徴とされてきた。さらに、中国古代の四神信仰（いわゆる動物神が東西南北の四方を守るという信仰）において、青竜は天上東方の守護神として、四神の首位を占めている。ところが、竜は「蛇」形の神とされているが、「女媧補天」の神話では、女媧とその兄または夫とされる伏羲（三皇の首座に置かれる神）は、どちらも蛇身人首と描写されている。ここの

「蛇」もやはり竜のイメージと重なり、聖獣として、架空の龍と実在の蛇は同一視されるということであろう。竜に対する信仰は中国では、最も古い形の信仰の一つと言える。

こうした神話伝説の影響の下に生まれた中国最古の詩集『詩経』にも、殷王朝の始祖契の異常誕生を意味する以下の「頌」（祖先の高徳を称揚する詩）がある。

天命玄鳥 降而生商^⑧

『詩経』の注釈書『毛伝』によれば、契の母簡狄が鳥の卵を吞んで、契が生まれたという。商の始祖に纏わる同じ系統の伝承は他にも『史記』や『楚辞』などにも見られる。鳥神を祭祀する伝統は中国の古代において既にあつた。朱雀（鳳凰、玄鳥ともいう）は天上南方の守護神として、四神の一つとして数えられる。中国最古の地理書『山海経』における山神崇拜の記載に鳥崇拜の思想も表出されている。「其神状皆竜身而鳥首^⑨」と。その祭られる神々はみな竜身鳥首の形をなしているというのは、やはり、鳥は古代の中国人の意識の深層に特別な異類として、存在していたからであろう。

北魏時代の地理書『水経注』（四十）に、「鳥為之耘、春拔草根、秋啄其穢^⑩」という表現が見られるが、鳥類が畑を耕耘することはあり得ないし、季節・時季に気を配り、除草・除虫などの農耕作業を行なうことができるわけもない。これはあくまでも鳥が野原に植物

の種をばら撒いたり、雑草や害虫を啄んだりする採餌行為に対する比喩にすぎないが、いかにも古代の農耕社会の伝承らしい。そこに古代の民衆の鳥崇拜思想の芽生えが見えるのであろう。

更に、志怪小説集『拾遺記』には、次のような記事がある。

越王入呉国、有丹鳥挟王而飛、故勾踐之霸也、起望鳥台、言丹鳥之異也。^⑪

これは、臥薪嘗胆の故事で知られる春秋時代に起きた呉越戦争を背景に、越王勾踐が呉国に入ったとき、赤い鳥がついていたので、勾踐は国の再興を遂げた後、望鳥台を建てたが、丹鳥は吉兆だという内容である。

以上の事例はいずれも鳥が古代人の崇拜対象であったことを物語っている。ちなみに、記紀の伝承でも、神武天皇東征の道案内をしたのは八咫鳥とされ、「今、天より八咫鳥をつかはさむ」と鳥神が神武天皇を助けたとされる。いずれも建国伝説に於ける鳥神の功を称えるものであり、鳥には神霊が宿るとされている。

さて、このような鳥にまつわる異常出生の話型は、「卵を呑込む」というモチーフが共通し、いわゆる始祖神話における卵生型の話型に属する。そこから、女性の出産を神秘視する古代人の命の生誕に対する畏敬が窺える。卵は生殖の神秘力があるものと古代人に信じられたからであらう。

時代は下るが、『搜神記』巻十四に「夫餘王東明」という伝承がある。それはいわゆる東明を始祖にする建国伝説で、高句麗の初代国王の生誕の伝承である。同じ巻十四にまた「鶻蒼」という伝承があるが、いずれも開国始祖は動物が人間と感応して生まれたのであると語っている。このような帝王や英雄の異常誕生の話から、動物を神聖化する古代中国人の原初段階の動物観が窺え、動物神への畏敬と崇拜がそこに込められていることが分かる。

一方、古代の日本においても、自然崇拜、動物崇拜、トーテムズムなどが原始宗教、民間信仰の形態として、盛んだったことは文献により裏づけられている。記紀神話における神統譜を辿るなら、初代天皇神武に至る皇統の尊い血筋に纏わる話は幾通りも記されている。『日本書紀』神代巻^⑫の記載では、神武天皇は鰐の後裔であるとされている。人類の属性と異なる異類との交渉であるからこそ、人並みでない資性の高さを有することを示している。

さらに、記紀神話における日本の最も古い話型（典型的な異類婚姻譚）「三輪山神話」のモチーフは、そのまま『平家物語』にある豊後緒方家の祖先伝説の上に移し変えられ、次のようになっていく。

或人のひとりむすめ、夫もなかりけるがもとへ、母にもしらせず、男よなよなかよふ程に、としも月もかさなる程に、身もただならずなりぬ。…むすめ母のをしへにしたがて、朝帰する

男の、水色の狩衣をきたりけるに、狩衣の頸かみに針をさし、しづのをだまきといふものを付て、へてゆくかたをつなひでゆけば、豊後国にとても日向さかひ、うばだけといふ嵩のすそ、大なる岩屋のうちへぞつなぎいれたる。：岩屋の内より、臥だけは五六尺、跡枕べは十四五丈もあるらむとおほゆる大蛇にて、動揺してこそはひ出され。：女婦て程なく産をしたれば、男子にてぞありける。：件の大蛇は日向国にあがめられ給へる高知尾の明神の神躰也。此緒方の三郎はあかがり大太には五代の孫なり。^⑮

いずれも古代人には、鰐とか蛇とかいう最強の力を有する爬虫類を祖霊とする思想があったことを物語っている。しかし、中国のような「卵生型」の話し型は日本の始祖伝説にはあまり見当たらない。「日本書紀」の冒頭では、「卵」に関する表現は次のようになってい

る。
古天地未剖、陰陽不分、渾沌如鶏子、溟滓而含牙。及其清陽者、薄靡而為天、重濁者、淹滯而為地、精妙之合搏易、重濁之凝竭難。故天先成而地後定。然後、神聖生其中焉。^⑰

前漢の「淮南子」^⑮ 卷二の「假真訓」を出典とするとされている。「鶏子」は所謂「卵」のことだが、ここの「鶏子」と「神聖」は中国の始祖神話における帝王誕生と卵とのかわりというような狭義

の意味に対して、もっと広義に万物の神が卵から生まれることを意味するのである。

上のような動物神と人間との繋がりを語るものは、一族の祖先の権威付けを図り、異常誕生による貴種性を強調するためである。いずれにせよ、古代人の動物観は明らかに上のような始祖神話に顕現している。

ところで、このような始祖の異常誕生の神話は、女性的、母権の性格をかなり強く伝えていいる。中国の神話の世界において、女神崇拜の古代神話が数多くあり、女媧や西王母などは女性を表象する神である。神仙思想を基盤とする道教においても、名高い八仙（道教の代表的な仙人）の一人は女仙（何仙姑）となっており、道教における女性崇拜は特に根強いものと言える。中国の一部の地方に未だに残存している古代の女神廟^⑱の遺跡にも女性崇拜の痕跡が見える。

考古学や歴史学の研究成果によれば、かつて、古代中国には長い間、母系社会形態が実在した。旧石器時代の晩期に既に母系氏族社会に入り、中国の最初の王朝とされる夏王朝（紀元前二千年頃）が形成されてから、次第に父権家長制の階級社会へ移行するとともに、それまで、母系社会において、生殖崇拜から派生した女性崇拜が父権制の確立によって、徐々に男性崇拜に取って代わられていく。

一方、日本では大化改新以前の社会は母系制度による氏族社会と

され、それまで母系社会が長期間続いたという説がある²⁰。天照大神は至上の太陽神で、しかも女神であるとされ、伊勢神宮をはじめ女神を祭る神社も多い。先史時代に儀礼などに用いられた母神像や縄文時代に製作された土偶など、いずれも女性をかたどった女神像で、女性的な体の特徴を極端に誇張したものが多く、多産や豊饒を祈るために、万物を生み出す大地を地母神として崇拜していたのも生殖崇拜に繋がり、そこに女性優位の思想が色濃く反映されていることが分かる。宗教的見地からすれば、日本の民族信仰に基づく原始宗教に日本人の祖霊崇拜、自然崇拜の原点が見出される。旧石器時代に始まり、縄文、弥生といった先史時代の神觀念及びそれに伴う祭祀儀礼が土台となつて、日本の原始宗教が次第に形作られていった。古くから、日本人に受け継がれてきた文化の深層には、生命の源である母を崇め、自然と共に生き、自然のリズムと生命のリズムを共鳴させる伝統精神が息づいている。

このように、女神を崇めることは母神崇拜に由来すると考えられ、古代人は父性が発見されるまでは、母性をすぐれた知恵、魔力と結びつけて考えていた。女性は生命を生み育てる慈悲深い母として、神格化されていた。始祖神話は女性崇拜の思想を伴うものとして、古代人の精神的世界を語っている。

二 動物観の変容と異類婚姻譚における 男尊女卑の萌芽

人間と動物との関係は時代を辿りながら、次第に変化してゆく。時代が下るにつれて、かつて神として仰がれていた動物は、その地位を失い、神霊視されるどころか、時に人間を脅かし、災いを及ぼす存在として語られ、恐怖や嫌悪の対象となってくる。それに伴い、異類婚姻譚も次第に新しい展開を見せ始める。中国の異類婚姻譚において、異類女房譚は主に次のような幾つかの特徴を呈する。

a 化けた美女が人間の男性を誘惑し、危害を加える。その被害が第三者によって食い止められる。

b 動物報恩譚。動物が心の優しい青年に助けられ、美女に化け、嫁に来る。

c 天帝は若者の親孝行ぶりに感動、或いは、善良な貧乏男に同情し、神女との結婚を成就させる。

a の場合、婚姻は異類の女の悲劇によって終幕となるが、b と c の場合、正体が知られ、婚姻に破綻が生じるかまたは果たすべき任務を終えることにより、別離が訪れる。c については、ここでの論証を省くが、a、b の例を二、三挙げたいと思う。

六朝の志怪説話集『異苑』所載の「猿の妻」は次のような内容で

ある。

晋の太元の末年、徐寂之が野道を歩いていると、蓮の葉をかざした娘が一人、寂之に手招きをした。喜んで家に連れ帰り、契りを結んだが、それからは度々娘が通ってくるようになった。すると、寂之は病気になって痩せ細り、美しい部屋と大きな建物、りっぱな宴席などが見えると口走るようになった。：数年たったのち、寂之の弟の晬之が、家の中に大勢の人数がするのを耳にした。そつと近づいて覗くと、数人の娘が裏口から出て行くところで、一人だけが土を運ぶ箕の下に身を隠した。：そこへ、いきなり人々が、「實の中に誰かいるぞ」と騒ぐ声がした。晬之がすぐに箕を持ち上げて見ると、牝猿が一匹いた。それを殺すと、寂之の病気も次第によくなくなっていった。^{②)}

この伝承は、最終的に動物は殺され、人間は第三者の救助によって助かるという終局を迎えるが、同類の伝承も、殆ど人間は動物を打ち負かし、人間の勝利で結末をつける。その「第三者」は通常の人より、和尚や道士が多いが、特に狐、蛇女房の場合は犬のこともあって、動物の妖気を見破って制するという設定が多い。明代の『警世通言』^{③)}所収の「白娘子永鎮雷峰塔」は同類話型の代表的なものである。道士が法力によって動物の化け物を雷峰塔に封じ込めるという名高い伝説は現在も尚、生きている。時代的に区分すれば、

ほぼ唐代までは、動物は平等視されていた。少なくとも劣等視されてはいなかった。唐代の伝奇小説『任氏伝』のような異類との愛情の葛藤を描いたものは、むしろ自由恋愛を賛美し、異類も人間の理想を託される存在であった。しかし、宋代以後、見てきたような動物と人間との仲を敵対関係で捉える設定において、動物の神性喪失のため、人類と異類の間に嘗てあった、境界を超えた親密な関係が破れている。ゆえに、嫌悪の対象として扱われていない動物報恩譚や神女との結婚譚においても、人間はやはり異類を異界の存在とし、決して同格視できなくなった。その傾向も話の結末に表出され、ストーリーの内容は枚挙に遑がないほど多種多様であるが、いずれも、悲話に終わるのが決まったパターンである。

清代の蒲松齡の『聊齋志異』は怪異小説の代表であるが、中には異類婚の話が少なからずある。巻九「小翠」はその代表的な一篇である。

その筋をまとめてみる。

浙江の王大常は幼い時、雷に打たれかかった狐を助けた。後に進士に及第し、県知事から侍御史に進んだ。その子の元豊は阿呆で、誰も嫁に來なかつたが、ある日、小翠という美しい娘が嫁に來、元豊と仲良く暮らした。小翠は美しいだけでなく、気が利き不思議な術を使って王大常を陥れようとする悪い役人

を遠い所へ流刑に処してしまう。三年経ったある日、小翠は元豊を熱湯の中に入れ、蒸し殺してしまふ。家中大騒ぎの中、男はふと目をあけて蘇り、夢がさめたように立派な男に生まれ変わった。ある日小翠は大事な玉の壺を落とし、舅姑に罵られ、小翠はもともと自分は狐であり、母の狐が王大常に雷の難を救われた恩返しに、色々尽くしてきたのだが、前世の縁も尽きたから、と言って出ていってしまった²³。

内容はまだまだ面白く続くが、動物はこのことで、人間界から追い出され、自分の世界に戻る。中国の異類婚の話において、宋代以後は狐は人を誑かすものとして、色気を漂わせ、悪玉役を演じてきた。妖狐または狐妖、とにかく妖怪の代名詞のように位置づけられてきたが、以上のような報恩譚においては、可憐な少女のように描かれている。それにも拘わらず、破局を免れない。ただ、人間が「見てはいけない」といったようなタブーを破ることによって、破綻が生じたのではなく、ごく自然の成り行きでストーリーが締め括られるのはこの事例の異彩を放つところである。悪玉役にせよ、善玉役にせよ、人間の内的自覚が生まれるようになるに従って、動物は人間には神なる存在でなくなった。しかし人間は動物神の信仰を否定する一方、報恩譚において、依然として身のこなしが自由な動物に超能力を与え、それに憧れを託すのである。

以上のような大まかな傾向は、日本の同類話にもよく見られる。ただ、日本の異類婚姻譚において、異類女房譚の場合、親孝行を讃えるものが一部ある他に、報恩譚に属するものが大半を占めているのは目立つところである。親孝行を讃える「蛤の草紙」などや、報恩のモチーフを伴う「鶴女房」、「狐女房」などには、中国説話との類似性が見られ、話の根底に横たわるのは、善行（親孝行、危難を救う）は功名・福寿・財運・婚姻・一族の繁盛の全てをもたらすという勧善の教えである。

中古以後の異類婚姻譚は仏教の影が濃く、異類女房譚も仏教思想の浸透が必須となるほど、仏教信仰の民間への普及が進んでいたことが分かる。仏教説話集の『靈異記』や『今昔物語集』は言うまでもなく、民間に流布していた説話も唱導説教の系列に属するものが多い。中世の異類婚説話は仏教と深い交渉を持ち、仏教的世界観が随所に見られる。また中古説話と重複するものも多い。近世に入ってから、宗教色は希薄になったとは言え、まだ完全に払拭されたとは言えない。特に、異類女房譚における教訓的なものでは、その結末は人間は動物に害されることが多く、怪談を教訓として捉えるものがほとんどである。前述の中国の類話によく見られるような第三者の救助により動物の危害から人間が救われるというパターンがあまり見られず、説話の教訓的意図がより明瞭に示されることが分か

る。このような異類女房譚の結末はほぼ二つの傾向に発展する。

a 人間の男は化けた美女に食い殺される。

b 人間の男は一念発起し、仏門に帰依する。

近世中期の奇談集『老嫗茶話』巻六所載の「オオカミ」の内容をまとめると、次のようになる。

山道に迷った江戸の裕福な男が一軒のあばら家をつつけ、道を探ねると、中にいる老爺と老婆、さらに、二十歳あまりの美しい娘が招いてくれた。娘の容色に引かれ、男は老夫婦に多額の金を与え、その娘を妻に娶って江戸に帰った。三年経ったある日、妻と一緒に里帰りし、かつての山小屋を訪ねると、狼の屍が二つ折り重なっているのを見た。女は「わが父母は、殺されてしまったのだ。なんと悔しいことか」と叫び、たちまち狼と化し、夫を喰い殺した²⁴。

動物を加害者と扱う代表的な事例であるが、この説話の根幹には仏教の因果応報、自業自得という鉄則が組み入れられている。仏教が色欲を禁忌とし、「好色」は身の破滅のもとだと訓戒されている。この説話に女色の戒めに焦点をあわせた宗教的モチーフを見出すことができる。

近世後期の松浦静山が書いた随筆集『甲子夜話』には大蛇の伝説が記されている。要約すると次のようになる。

貧乏な医者男は患者がお札に連れてきた女を妻に娶った。一年経って、男の子が産まれ、男は妻の「見るな」との警告を無視し、覗き見ると、大蛇が授乳していた。正体を知られた妻は明珠を夫に与えて去る。地元の領主に明珠を奪われ、男は海辺に出て妻を求めると、松林から現われた妻に別の明珠を与えられた。更にもしこの珠も奪われたら、即座に子を抱いて遠くに走るように助言し、姿を消した。第二の明珠を奪われた夜、雲仙の山は裂け、城と町は忽ち土中に埋れ、領主も明珠も地底に沈んだ。逃れて助かった男子はそのち律僧となった²⁵。

この伝承は豊玉毘売命型の話型をもつ説話であるだけに、異類を直接的な加害者とせず、間接的な加害者として設定している。しかし、人間の男性と異類の女との交渉はやはり山が崩れ大地が裂けるような災禍を来たす悪縁とされている。男は災難の後、仏に帰依を誓って、悪縁を断ち切る仏神に救いを求めるといふ結末はいかにも仏教的モチーフにふさわしい。

異類女房譚の悲劇的な結末は人間の動物観の変容を裏付けると同時に、人間の価値観の逆転も体現している。

一方、異類譚の発展を追跡すれば、中日説話の間に、思いがけない一致があることが分かる。まず、異類女房譚に見られる報恩的要素が一切入っていない。それから、畜生として異類譚は異類女房

以上に、劣等視されることが多いところも共通している。さらに、両方とも性差意識による女性観が異類女房譚以上に端的に示されている。その話型は、次の二通りに大きく分かれる。

a 婚姻の強要型。異類は人間との約束を果たし、婚姻を迫る。

b 婚姻の不成立型。

a は始祖神話が民間に零落したものと見なしてよく、新しい氏族の起源を説く始祖型が多い。また、異類女房譚における類話とは違い、人と動物との隔絶感が強調され、人間の女が人煙稀な別世界へ連れていかれるように描かれるものが多い。『搜神記』巻十四「蛮夷の起源」には次のような描写がある。

盤瓠将女上男山、草木茂盛、無人行跡。…王悲思之、遣往視覓、天輒風雨、嶺震雲晦²⁶。

この描写ははつきりと一線を画すように人間と動物を隔絶させる。また、この類型（特に婚姻強要型の異類智譚など）には、異類が動物の姿のまま、人間への変身をせずに人間と結婚する例が多く、明らかに人間と動物のそれまでの一体感が崩れている。人間の動物観はここまで来て神話時代とは正反対のものとなった。このような異類智譚には、時々「約定の代償のための婚姻の強要」²⁷があるため、人間が異類を騙し殺す結末を示す変型も少なからずある。それはまたbに属するものとなる。

b の場合、ストーリーは異類女房譚と同じような展開を見せるものもあれば、異類智譚ならではのものもある。ここでは特に後者に着目したいと思う。その特徴を二点にまとめて言えば、一つは、人間の女性は動物との交渉をってしまった結果、生ずる羞恥心によって死ぬという貞操観念を説くもの。もう一つは前者の対極を成し、相手が動物であるにも拘わらず、それに尽くそうとする女性の自己犠牲的な献身ぶりを称えるものである。

『搜神記』巻十八所載の「白犬のいたずら」は次のような内容である。

田琰という男は母が死ぬと葬に服し、いつも廬に寝起きしていた。ところがある晩、ひょっこり妻の部屋に入ってきた。妻に埋葬中という理由で断られたが、琰はとりあわなかった。その後しばらくして、琰は妻の部屋にちよつと顔を見せたが、何も話しかけない。妻は不思議に思ったし、琰に文句を言った。そこで琰は、妖怪が妻にとりついたり気づいたのであった。そこで夜になっても眠らずに、葬服を廬の上にかけておいた。しばらくすると一匹の白犬が近寄って葬服を銜えたと思うと、人間に化け葬服を着て家の中に入っていく。琰が後を追って入ると、犬がいましも妻の寝台に上がろうとしているところだった。そこで直ちに殴り殺したが、妻は恥ずかしさのあまり、死んで

しまった。²⁸⁾

人間が動物に犯され、動物は殺され、人間も生きてはいけないという結末は異類女房譚には見当たらない。異類女房譚における人間の死は、動物に食い殺されるというような「自然死」であるのに対して、ここでの死に至る形態は極めて不自然である。死をもって罪を贖うような匂いがする。

一方、「著墓伝説」²⁹⁾も日本の有名な異類婚姻譚である。大物主の妻となった倭迹迹日百襲姫命は、夫が蛇であることに驚いたので、大物主は「私に恥をかかせた」と言って三輪山に帰っていき、倭迹迹日百襲姫命は悔しく、自殺するというような伝承だが、同じく贖罪のための死であると受け止めてもよからう。この話は前話と一脉通じるところがあり、つまり後者の「見るな」のタブーを破るのと、前者の動物（配偶者以外の男）に貞操を奪われるのと、いずれも羞恥行為として、死に値するものであるとされている。神話と説話において、動物はそもそも次元の違うものとして伝承されているが、しかし、この両話に限って言えば、動物神であろうと、軽蔑視される畜生であろうと、いずれも男性原理の支配下の考えのもとに左右に揺れる。

おわりに

本稿は異類婚姻譚におけるジェンダーの中日比較を図るもので、主にその表出様式の分類及び社会形態や意識形態による形成原因の究明を中心に、中日の異類婚姻説話を並べる形で考察を進めてきた。

以上の考察を踏まえて言えるのは、動物観の変容と社会形態の転換、更に宗教伝来に伴って、男性中心の倫理観が徐々に異類婚姻譚に投影してくるのは自明だということである。異類婚姻譚は始祖神話から始まり、説話への変容を経て、怪異文学へと結実してきた。

その成長するプロセスにおいて、動物神信仰の零落につれて、人間の動物観が大きく変わり、動物も話のモチーフに応じて、様々に彩られるようになった。男性本位の考え方によって、動物も女性に役割モデルの提示をするのに利用された。大まかに分類すれば、異類女房譚における異類の女は概ね次の二つの範囲を出ない。

a 善玉役——人間の男性の運勢をよくする善良な存在。

b 悪玉役——男を誘惑し墮落させる邪悪な存在。

前者の役目は美しい妻・長寿・子孫繁盛・社会的地位という男性の人生最大の願望を叶えさせ、後者は男性の好色の口実になるのである。

一方、異類婚姻譚において、異類女房譚に見られない人間（女性）

の特徴と言えば、一つしかない。つまり自分を越えたもつと大きな価値のために生き、自己を犠牲にすることである。その大きな価値は貞操観念であったり、夫に一心に絶対服従し身を以って尽くす義務であったりして、とにかく無理に押付けられた所謂「女」としての有るべき姿である。

このように、時代が下るにつれて、これらの伝承は始祖神話との間には大きな隔たりができるとともに、次第に変化した人間の動物観が巧みに性別観念と融合され、異類婚姻譚において、男性原理はいろいろな形で作用するようになった。端的に言えば、異類婚姻譚は男性本位の都合に合わせたものであるからこそ、初めて成立できたのだということになるであろう。言い換えれば、「男性中心主義」が異類婚姻譚を培う豊かな土壌になったのである。既述したように、異類婚姻譚はどの国の民族にも、また時代を超えて存在するものがあり、中日の異類婚説話はそれぞれ多少異なった様相を呈しているが、両者の間には一貫した傾向の違いが見られないのである。

注

- ① 江馬務『日本妖怪変化史』中央公論新社、二〇〇五年。
- ② 中村禎里『日本人の動物観』海鳴社、一九八四年。
- ③ 楊天宇『礼記訳注』上海古籍出版社、一九九七年。
- ④ 朱熹集注『論語・孟子』遠方出版社、一九八〇年。

異類婚姻譚におけるジェンダーの中日比較研究

⑤ 紅顔は昔から美しい女性の代名詞として使われており、曹植の『静思賦』は、「天何美女之爛妖、紅顔暉而流光」と女性の美しさに感嘆し、杜甫の『暮秋憶狂斐道州手札』も「憶子初尉永嘉去、紅顔白面花映肉」と女性の容顔を賛嘆している。禍水は人を惑わし、失敗させる女性の喩えである。

⑥ 司馬遷著『史記』卷八 遠方出版社、一九八〇年。

⑦ 注⑥に同じ。

⑧ 目加田誠訳『詩経・楚辭』平凡社、一九六九年。

⑨ 楊帆、邱效瑾注訳『山海経』安徽人民出版社、一九九九年。

⑩ 鄺道元著 史念林等注訳『水経注』華夏出版社、二〇〇六年。

⑪ 王嘉著 孟慶祥、商微姝訳注『拾遺記訳注』黒竜江人民出版社、一九八九年。

⑫ 荻原浅男、鴻巣隼雄校注『日本古典文学全集 古事記・上代歌謡』小学館、一九七三年。

⑬ 千宝著 竹田晃訳『搜神記』平凡社、一九六四年。

⑭ 菅原征子『日本古代の民間宗教』吉川弘文館、二〇〇三年。

⑮ 坂本太郎等校注『日本書紀』（日本古典文学大系）岩波書店、一九六七年。

⑯ 高木市之助等校注『平家物語』岩波書店、一九六〇年。

⑰ 黒板勝美編『日本書紀 前・後編』（『新訂増補国史大系』）吉川弘文館、一九七一年。

⑱ 何寧『淮南子集釈』中華書局、一九九八年。

⑲ 陸思賢『神話考古』文物出版社、一九九五年。

⑳ 李建鋼『大化改新前後日本社会状況的比較』『人民論壇』、二〇〇九年第三十期。

㉑ 前野直彬編訳『六朝・唐・宋小説選』平凡社、一九六八年。

- ②② 馮夢龍『警世通言』江蘇古籍、二〇〇四年。
- ②③ 展世恒校注『聊齋志異』大衆文芸出版社、一九九八年。
- ②④ 高田衛『近世奇談集成』図書刊行会、一九九二年。
- ②⑤ 松浦静山著、中村幸彦、中野三敏校訂『甲子夜話』平凡社、一九七七年。
- ②⑥ 汪紹楹校注『搜神記』（中国古典文学基本叢書）中華書局、一九七九年。
- ②⑦ 市古貞次等監修『日本古典文学大辞典』岩波書店、一九八三年。
- ②⑧ 注⑬に同じ。
- ②⑨ 注⑮に同じ。